コードギアス「罪と罰」

メイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
コードギアス「罪と罰」

【Ｎコード】
Ｎ９７０５Ｗ

【作者名】
メイ

【あらすじ】
もしもギアスの無い世界だったら、という仮定の下で１期冒頭時点から展開するパラレルストーリー。ただの人間でしかないルルーシュが葛藤しながら生きていく、泥臭いお話です。

第1話

「参ったな……」

アッシュフォード学園生徒会の副会長、ルルーシュ・ランペルージは、紫の瞳に明らかな困惑を浮かべ、窓の外を目まぐるしく流れていく景色を見送った。

整った容貌と、年齢にしては少々華奢な肢体を学生服に包んだ彼は、現在、旧日本の地下鉄を爆走中である。正しくは、彼の乗り込んだコンテナが、彼の意思とはお構い無しにひた走っている。先ほど、新宿三丁目という駅の標識が通り過ぎていくのが見えたから、ここは既に、神聖ブリタニア帝国、エリア11の中でも治安の悪い、日本人――イレブンたちの居住区である新宿ゲットーの内部だろう。ブリタニアの学生には無縁の場所だ。

本来なら今頃、学園で午後の授業を受けていた筈だったのに、なぜこうなったのか――事の発端は、昼休みに生徒会のリヴァルと行った、チェスの代打ちからの帰り道だ。後ろから猛スピードでやってきたトレーラーが、二人の乗ったバイクを避け損ねて、道路の脇に衝突してしまったのだった。

誰も中の人間を救助しようとしないのに業を煮やして、トレーラーのコンテナに乗り込んだ、までは良かったのだが……トレーラーは、再び走り出し、現在に至っている。おそらく運転者はルルーシュが乗っていることを知らないし、ルルーシュも敢えて知らせるつもりはなかった。

走り出して間もなく、拡声器で投降を呼びかける声が中のルルーシュにも聞こえてきた。このトレーラーを運転しているのは、どうやらテロリストらしい。線路に入り込む直前には、運転席から出てきた赤い髪の気の強そうな女が、ルルーシュに気づくこともなく、人型兵器、ナイトメアフレームに乗って外に飛び出していった。

トレーラーの中には、でかでかと鎮座した何かの装置が残ってい

るが、脱出に使えるような代物には見えない。テロリストのトレーラーに載っているものが、まともなものである筈がないから、勝手にいじるのは危険だ。毒ガスが噴出してきたらどうする。

ルルーシュが頭の中で状況を整理して、打開策を練っていた時のことだった。突然の衝撃がトレーラーを襲った。録に受身も取れずにコンテナの壁に叩きつけられ、内蔵を圧迫されて、呻き声が洩れる。

どうにかルルーシュが立ち直ったときには、トレーラーは既に停止していた。衝撃で開いてしまったコンテナの側壁から、よろめきつつ足を踏み出すと、風を切る音が耳に響いた。

横合いから踊りかかってきた人物の蹴りを咄嗟にガードできたのは、ルルーシュの運動神経からすれば、奇跡に近い。だが、鍛えていない体は、コンテナの奥の壁に向かってたやすく吹き飛んだ。

「これ以上、殺すな！」

人影が、何事か叫びながらさらに追い打ちをかけてくるのを、ルルーシュは必死に防いだ。飛んでくる拳を、手を交差させて防ぐ。そこで、ルルーシュは、相手がマスクをつけた重装備の歩兵だと気づいた。時折メディアで紹介されているブリタニア軍の兵士そのものだ。どうやら自分はテロリストと思われているらしい。冗談ではない。

気迫を込めてマスクに覆われた相手の顔を睨み付けると、相手の身体は僅かに揺れた。やがて、その腕から力が抜けて、拳を引くのを、ルルーシュは油断なく見守った。

「ルルーシュ。ルルーシュだよね」

けれど、思いがけなく歩兵に名前を呼ばれて、ルルーシュは目を見開いた。ブリタニア軍の兵士に、親しげに名前を呼ばれるような知り合いはいない。

「僕だよ。スザクだ」

兵士は、躊躇いもなくマスクを取って素顔を晒した。にっこりと微笑む。

「スザク……！？スザクなのか！」
マスクの下から現れた、茶色がかった髪、穏やかな黒い瞳、人の良さそうな顔は、確かにルルーシュの過去の記憶を刺激した。自分と同年代の少年兵士は、紛れもなく、七年前、ブリタニアが日本を占領した際に別れたきりの、幼馴染み。かつてルルーシュが、幼い日にブリタニアへの復讐の誓いを告げた、ただ一人の相手だった。
「そうだよ、僕だ」
「お前、ブリタニア軍の兵士になったのか……」
ルルーシュは、複雑な心境で呟いた。日本人――イレブン。母国を占領され、日本人という名前を取り上げられた彼こそ、ブリタニアを憎んでいてもおかしくないというのに。まして、占領当時、ルルーシュ以上に彼の立場は微妙だった。
「うん、名誉ブリタニア人になったんだ。ルルーシュ、きみは……？こんなところにいるなんて、まさか」
「馬鹿、そんな訳ないだろ」
眉をひそめる幼馴染みに、ルルーシュは慌てて否定した。
「俺は、巻き込まれただけだ」
すると、スザクはほっとしたように微笑んだ。
「良かった。きみにまた会えて嬉しいよ、ルルーシュ」
その言葉は、純粋に七年ぶりの再会を喜んでいた。つられて、ルルーシュも微笑む。
「ああ。俺もお前が無事で嬉しい」
「で、どうしてここに？」
「それが……」
ルルーシュが言いかけたところで、トレーラーの横合いから、カッと、眩しい光が辺りを照らし出した。コンテナの開いた部分にいたルルーシュは、避けようもなく、姿が露わになる。
「よくやった、柩木一等兵」
皮肉下な声が地下鉄構内に響き渡った。眩しさを堪えて見れば、ブリタニアの兵士たちが、トレーラーの外に銃を構えて立っている。

一団を率いているのは、先頭に立った片頬に大きな傷の走った男だ。服にいくつもの階級章をつけていることから、かなり地位の高い士官であることが分かる。
「はっ、目標を発見し、巻き込まれた民間人を保護致しました」
「民間人？」
スザクの報告を聞くと、男は、舐めるようにルルーシュの頭の上から爪先までを検分し、鼻を鳴らした。
「ブリタニアの学生か。柩木一等兵、こちらへ」
素直に目の前までやってきたスザクに、男は拳銃を差し出した。
「貴官の功績を認めよう。ただし、目撃者は必要ない。許可する。撃ち殺せ」
スザクとルルーシュは同時に息を呑んだ。
「彼は一般人です」
「テロリストだ」
抗議の声に、男は冷然と言い放った。スザクは反論の言葉を探して、やがて首を振った。
「一般人を撃つなど、自分には」
「馬鹿かお前は」
皆まで言わせず、ルルーシュは後ろから口を挟んだ。
スザクがぎょっとして振り向いたのは勿論、士官の男までもが意外そうにルルーシュを見る。
「この場での軍命無視に何の意味がある。お前がやらなければ、そこにいる兵士どもが俺の身体を蜂の巣にするだけだ。……どうせ俺が死ぬのは同じなら、せめてお前がやれ」
「ルルーシュ！？」
抗議の声を上げる相手に、ルルーシュは、目配せとともに、僅かに唇を動かして見せる。スザクは目を見開いた。
「ほお、潔い覚悟だな。柩木一等兵、貴官も見習ったらどうだ」
さすがブリタニア人だ、と男はルルーシュをテロリストと断じたその口で、今度は名誉ブリタニア人であるスザクを貶める。

幼馴染が拳を握りしめるのが、ルルーシュには見えた。数瞬の逡巡の後、男の差し出す拳銃を取ると、振り向いて、のろのろとルルーシュに銃口を向ける。逆行に照らし出されたのは、今にも泣き出しそうな顔だった。

「さっさとやれ。苦しむのはごめんだ」

無様に逃げ出したところで意味は無い。これだけの人数に囲まれていれば、あっという間に蜂の巣だ。だから、ルルーシュは目を瞑ってその時が来るのを待った。

「ごめん……」

悲痛な声と共に、一発の銃声が、辺りに響いた。

第2話

兵士たちがコンテナに載っていた謎の物体を運んで去ってしまうと、後に残されたものは、無残に破壊されたコンテナと、運転席で息絶えたテロリスト、そして血溜まりの中、コンテナの側に打ち捨てられたように倒れ伏す少年だけだった。

しかし、命あるものが完全に失われ、その場に静寂が戻ったかのように見えた瞬間、少年はむくりと起き上がった。

途端、腹部を貫いた痛みと、流れ出ていく血――命の気配に、ルルーシュは顔を歪めた。

弾が急所をはずれているのかは怪しい限りだが、あの状況で、即死を免れているのだから、スザクに感謝する他ない。「急所をはずせ」というルルーシュの唇の動きを、彼は正確に読み取ってくれたようだ。

幼馴染みが軍務より自分を優先してくれたのは、思いがけない僥倖だったが、急いで止血をしなければ、その幸運がたちまちのうちにルルーシュの元から駆け去ってしまうことは確実だった。既に、胸と背中は自らの流した血でべっとりと濡れている。

去り際にスザクが足でルルーシュの身体の下に押し込んでくれたものを手に取って眺め、ルルーシュは苦笑した。軍用の救急医療用キットだ。

七年前のルルーシュは、一人では何一つ満足にこなせない子供だった。その頃しか知らないスザクから見れば、ありあわせの物で傷の手当てなどできるわけがないと思ったのかもしれない。その判断に感謝する反面、悔しくもあった。その判断が正しいからこそ尚更だ。

中に入っていた止血帯で撃たれた箇所を巻き、ついでに痛み止めを自分の体に打つ。

その一大作業をこなし終えて、ルルーシュは息を吐いて横たわっ

た。遠くに爆音が聞こえる。おそらくテロリストとの戦いがまだ続いているのだ。それが終わるまで、下手な動きをするのは危険だ。
スザクに撃たれたことに、悔いはない。あの瞬間、助かるための算段をいくつも考えたが、一番助かる可能性が高いのはこの方法だった。――悔いがあるとすれば、余計なプライドなぞを発揮して、事故車の救助になど向かった自分の甘さだ。たとえ事故が自分たちのせいだろうが、見ないふりで、学園に戻るべきだったのだ。
無様だ。自分が無力であることくらい、十分に承知していたつもりだったのに。
（守るべきものをおいて、こんなところで、俺は死ぬのか）
脳裏をよぎるのは、盲目の上に、自力では歩くこともできない妹の姿だった。七年前から、二人で支え合うように生きてきた。自分がいなくなったら、彼女は――ナナリーはどうなるのだ。
携帯電話をポケットから取り出す。時間は午後二時を指している。幸いにも、地下とはいえかつての駅の近くなのだろう、電波は辛うじてつながっていた。登録された番号の一つを呼び出して電話をかけると、場に不釣合い極まりない、明るい声の留守番電話が流れ出す。
「は～い、あなたのミレイ・アッシュフォードはただいま授業中のため電話にでられませ～ん！ご用の方は、ブザーのあとにご用件をどうぞぉ！」
ルルーシュは、一拍おいて話し出した。努めて平静な声を装うが、多少息が荒くなるのは致し方ない。
「会長、ルルーシュです。少し、ドジをやってしまって動けませんので、迎えを寄越してもらえませんか。位置を送ります。おそらく近辺は、軍に封鎖されていますから、封鎖が解け次第、人目につかないように回収していただけるとありがたいです。それから……ナナリーのこと、よろしくお願いします」
最後に迷って一言を付け足し、ルルーシュは通話を切った。携帯電話を持つ手を下ろし、目を瞑る。出血のせいか、それとも痛み止

めのせいか、ひどく眠い。
　果たして、封鎖が解けるのと、自分の命が尽きるのとどちらが早いだろう。ルルーシュの体力から言って、助かるかは五分五分か、それよりももう少し低いだろうか。だが、こんなところで死ぬわけにはいかない。
「俺は……俺は、生きるんだ……」
　瞼の裏に浮かぶ愛しい妹の姿に呟いたのを最後に、ルルーシュの意識は闇に落ちていった。

　重苦しい気持ちで軍本部に戻ったスザクを待っていたのは、眼鏡を掛けた銀髪の科学者然とした白衣の青年と、肩で黒髪を切りそろえた、困ったような顔をした軍服姿の女性だった。二人とも明らかにスザクより階級が上だ。
「きみが～枢木スザク君？」
　間延びした声で、青年が聞く。スザクが肯定すると、青年の瞳がきらりと輝いた。
「きみ、ナイトメアフレームの騎乗経験は～？」
　唐突な質問に、スザクは戸惑いを隠さずに答えた。
「自分は名誉ブリタニア人で、騎士にはなれません」
　軍内では、ブリタニア人と、ナンバーズ出身である名誉ブリタニア人の扱いは、一線を画している。名誉ブリタニア人には、普通の武器の携帯すら許可されない。軍内でのエリート――ナイトメアフレームの操縦者になるなど望むべくもないことだ。だから、スザクの答えは、軍の常識から言えば、聞くまでもないことの筈だった。
「お～め～で～と～う！世界でたった一台のナイトメアフレームがあるんだよ」
　にこにこと言う青年を、スザクは、呆気にとられて見つめた。
　青年はロイド、横に立つ女性はセシルと名乗った。何でも、特別派遣嚮導技術部という、第二皇子の元でナイトメアフレームの研究開発を行っている部隊だという。

「盗まれた物は取り返したので、まもなく作戦は終了するのではないのですか？」
遠くで轟く爆音に、スザクは眉を曇らせた。テロリストがまだ頑張ってはいるようだが、此彼の戦力差からいって、鎮圧されるのは時間の問題の筈だ。
「それが……」
しかし、スザクの当然の疑問に、セシルは困った顔で言いよどんだ。
「間抜けにも、輸送中のナイトメアフレームを、テロリストに奪われちゃったらしくて、ちょっと長引きそうなんだよね～」
代わりに答えたのはロイドだ。その表現には、他の部隊に対する遠慮とか配慮とかいうものは存在していないようだ。
スザクは、自らの顔がひどく強ばるのが分かった。戦闘が終了し、この一帯の封鎖が解けなければ、先ほど自分が撃った友人の脱出は難しい。彼が撃てと言ったからには勝算があってのこととは思うが、急所を外したとはいえ、一秒鎮圧が長引くごとに、彼の生存率は下がっていく。
本音を言えば、今すぐにでも軍を抜け出して、ルルーシュを助けに行きたくてたまらなかった。それをしないのは、封鎖が解けない限り、軍に見つからずに彼を救助できる可能性が限りなく低いと分かっているからだ。あの様子では、生きていることを知られれば、今度こそ確実にルルーシュは殺される。
力なく横たわった彼の姿を思い出せば、背筋が冷えた。そんなことにはさせない。
「ま、時間の問題だとは思うけどね、せっかくデータを取るチャンスだからね、ごり押しで出撃許可をとるつもりだよ」
能天気なロイドの横で、セシルは対照的に気遣うような表情を浮かべている。
「相手はイレブンなのだけど……」
ナイトメアフレームに乗ってほしい、という願っても無い申し出

に、スザクは即答した。
「乗ります。いえ、乗らせてください」
敵は同胞と言えど、テロという間違った手段を用いた相手だ。討つことに躊躇いはない。――とにかく、今は、ルルーシュを助けるために、戦闘を最速で収束させる。
友のいるだろう方向に一瞥を投げて、スザクは拳を握り締めた。

第3話

アッシュフォード学園の生徒会長、ミレイ・アッシュフォードが授業を終えてクラブハウス棟の生徒会室に戻ってきたのは、午後三時を少し回った頃合だった。

既にやって来ていた役員のリヴァルが、ミレイの姿を認めて、盛大な嘆きの声を上げる。

「会長、聞いてくださいよ、ルルーシュの奴、ひどいんですよ〜」

他の役員の姿はなく、誰かに愚痴を聞いてほしくて仕方がなかったようだ。だが、彼が同じクラスで副会長のルルーシュにぞんざいに扱われているのはいつものことである。

「あいつが俺を置いてけぼりにするから、俺は授業に間に合わなくて……」

「あーはいはい、可哀想ねー」

くどくどと続けるリヴァルの言葉にあからさまに適当な相槌を打ち、ミレイはテーブルの上に置いた鞄の中から、点滅を繰り返す携帯を取り出した。授業中に何やら着信が来ていたようだ。発信者の名前を見て、ミレイは肩を竦める。

「おや、噂のルルちゃんから着信があったみたい」

「全く、変な方向にプライドを発揮するのはやめてほしいって言うか……って、マジっすか！？」

俺のことは放置かよ、と嘆くリヴァルを無視して、ミレイは留守番電話の録音を再生した。

耳に当てた携帯電話から、すぐに聞き慣れた声が流れてくる。しかし、相手の様子がおかしいことに、ミレイは名乗りの段階で気が付いた。妙に苦しそうだ。用件の内容、締めの言葉に、ますます違和感を強くする。

――ナナリーのこと、よろしくお願いします。

最後のその一言の前には、躊躇うような間があった。ルルーシュ

という少年は、ミレイの知る限り、とてもプライドが高く、滅多なことでは他人に助けを求めたりはしない人間だ。まして、彼の最愛の妹に関しては、過保護もいいところで、人任せにすることなどありえない。そうせざるを得ない何かが彼の身に起きたということか。

場所は軍の封鎖地域だという。考えられる最悪の事態に、全身から血の気の引く音が聞こえてきそうだった。

震えてしまいそうな手を叱咤して、慌ててルルーシュに電話をかけ返す。祈るような気持ちで電話が繋がるのを待ったが、空しく呼び出し音が響くだけで、一向に通話に出る気配はない。

「リヴァル、ルルちゃんとどこで別れたの？」

自然と詰問口調になったミレイに、リヴァルはきょとんとした顔を向けた。

「どこって……今話してたじゃないすか。国道の途中で、俺らの後ろを走ってた車が事故っちゃって、その救助に行っちまったんですよ、あいつ」

どうかしたんですか、と聞くリヴァルを他所に、ミレイは部屋に取り付けられたテレビに、ニュース番組を映し出した。

途端に、煙を上げるビルの写真が大写しになる。

「……を爆破したテロリストですが、新宿ゲットーに逃げ込み、抵抗を続けておりましたが、つい先ほどクロヴィス殿下の指揮の元、鎮圧されたとの情報が入りました。まもなく交通規制も解除される見通しです」

「へ～、イレブンのテロがあったのか～」

リヴァルはテレビ画面を見つめて呑気な感想を口にするが、ミレイはそれどころではない。

「ちょ、ちょっと会長！？」

ミレイは、驚くリヴァルの声を後ろに聞きながら、生徒会室を走り出た。慌ただしく家に電話をかけながら、クラブハウスの出口へと向かう。

「ミレイだけど。信用できる人を至急車付きで学園まで迎えに寄越

して頂戴。……え？大丈夫、危ない事じゃないわ。足を挫いて動けない友人を拾いに行くだけよ。念の為毛布と担架も持ってきて」
電話に出た執事に矢継ぎ早の指示を出しながら、ミレイは不吉な想像が、間違いであるように祈っていた。

渋る家人を宥めて、どうにか新宿ゲットー、廃線となっている地下鉄新宿三丁目の駅にミレイたちが辿り着いたときには、時刻は三時半を過ぎようとしていた。
「本当にこの先にご友人がいるのですか」
言われるまま担架を担いでやってきたアッシュフォード家の召使たちの疑問は、尤もなことだった。
駅の構内は、完全な廃墟と化しており、電気もない。地下に降りれば、先を行くミレイが持った懐中電灯の細い明かりだけが頼りだ。人の気配はなく、物音といえば、ミレイとミレイについて歩く二人の足音が寒々しく響くだけだった。
「そうよ」
ミレイはそれだけを言って、駅のホームから線路の上に飛び降り、小走りに近い速度で線路沿いに歩きだした。男たちは顔を見合わせると、諦めたように溜め息をついて、後を追って歩いてくる。
一刻も早くルルーシュの元へ行かなくてはならない。ミレイの頭はその思いでいっぱいだった。こんな場所に好き好んで入り込む筈がないから、彼は何か事件に巻き込まれた筈なのだ。おそらくは、命に関わる何かに。
やがて、視界の先に、トレーラーと思しき車の背面が見えた。ここは地下鉄で、道路ではない筈なのに、電車ではなくトレーラーだ。ルルーシュが事故車の救助に向かったと言っていたリヴァルの言葉を思い出して、ミレイは走り出した。
トレーラーは荷台の側面が開いており、そこからぽかりとした暗闇が覗いていた。明かりを近づけて中を覗き込み、照らし出された光景に、ミレイの喉から悲鳴が漏れる。

床に力なく投げ出された手足、血の気の失せた白い顔。瞼を閉じた秀麗な顔立ちは、まさしく探していた人物のものだ。
「ルルちゃん！」
叫んで駆け寄るが、ルルーシュは、ぴくりとも動かない。胸にまかれた布と、彼から流れたと思しき血だまりを見て、ミレイは泣きたくなった。間に合わなかったのだろうか。留守電なんかにせず電話に出ていれば。
「お嬢様！」
追いついて来た男達がルルーシュを見て、息を呑む。
「失礼します」
片方の召使がミレイの前に出て、ルルーシュの脈を取る。厳しい表情が少しだけ緩んだ。
「まだ生きています。とにかく急いで運び出して病院へ」
動かしても何の反応も返さない少年を担架に乗せて、一行は、走るような速度でその場を後にした。

第4話

その日、アッシュフォード学園の生徒会役員、シャーリー・フェネットがミレイ・アッシュフォードからの着信を受けたのは、水泳部の活動を終え、生徒会に顔を出すべく着替えていた時のことだった。生徒会メンバーに用事があるときは、豪快に校内放送で呼び出すのを常とする彼女が、電話をかけてくるとは珍しい。

「はい、もしもし？」

「あ……シャーリー？」

通話に出て、シャーリーは眉をひそめた。

返ってきた声には、いつもの勢いがない。しかも、妙に掠れていて、鼻声だ。まさか泣いているのだろうかと一瞬思ったが、女王様然としたミレイが泣くところなど全く想像ができないから、気のせいだと思い直す。

「はい、どうしたんですか？」

「ちょっと、お願いがあって……迎えの車を寄越すから、ナナちゃんを連れてきてくれる？」

会長の口から飛び出した、これまた意外な言葉に、シャーリーの胸にもやもやとした不安感が頭をもたげた。

ナナリー・ランペルージは、生徒会副会長のルルーシュ・ランペルージの妹だ。足が悪く、盲目なため、特別に許可されてクラブハウスに兄と共に住んでいる。そのため、まだ中学生ではあるものの、半分生徒会メンバーみたいなものであるが、身体の事情から、連れ出す時はいつもルルーシュが傍についていた。

「お願いできる？」

「は、はい、水泳部の練習も終わりましたし、それは構わないんですけど……」

「良かった、悪いけどお願いね」

続いてぷつりと聞こえた切断音に、シャーリーは目を瞠る。

「ちょっと、会長！？」
叫んでも、既に通話は切れている。まるで、シャーリーに反問されるのを恐れているかのような性急さだ。
「私が連れてくって、ルルは～？なんなのよ～もう～」
胸に暗雲のように湧き出す不安を振り払うように、明るい口調でぼやきながら、シャーリーは着替えを済ませて、更衣室を飛び出した。

テーブルの上の通話機が音を立てるのに、ナナリーは顔を上げた。読んでいた点字本から手を上げて、ボタンを押す。
流れてきたのはナナリーとルルーシュを世話してくれているメイド、小夜子の平坦な声だ。
「シャーリー様がいらしておいでです」
「まあ、シャーリーさんが？でも、お兄さまはまだ」
「ナナリー様に御用だと伺っております」
「私に？」
ナナリーは首を傾げた。
珍しいこともあるものだ。生徒会のメンバーとはルルーシュを通じて親交があるが、個別に親しいわけでは決してない。
「分かりました。こちらに繋いでください」
「かしこまりました」
プツリという音とともに、通話モードが切り替わる。
「こんにちは、シャーリーさん。すぐにそちらに伺いますね。生徒会室でいいのでしょうか」
ナナリーが話すと、返ってきたのは妙に歯切れの悪い声だった。
「あ、ううん、実は、会長にナナちゃん連れてきてほしいって頼まれてて……」
私にもよく分からないんだけど、とモゴモゴ言い訳じみた言葉が続く。
ナナリーは眉をひそめた。

「ミレイさんが、学園の外にですか？」
「う、うん、多分……」
珍しいことの連続に、不安が胸を掠める。何かあったのだろうか。
ミレイがナナリーを単独で学園の外に呼び出すなどということは、記憶にある限り、初めてのことだ。
「……分かりました。小夜子さんと一緒にそちらに向かいます」

ナナリーが小夜子に車椅子を押してもらってクラブハウスの外に出ると、軽い足音が寄ってきた。
「すみません、お待たせしてしまったでしょうか？」
「大丈夫、全然待ってないから」
すぐに明るい声の返事が帰って来たが、明らかに無理をしている風だ。彼女もやはり不審に思っていることがあるのだ。
何となく気まずい沈黙の中、三人は進んだ。正門を出てすぐに待っていた車に、ナナリーは小夜子に抱き上げられて乗り込む。隣に小夜子、助手席にシャーリーが乗り込んで、車は動き出した。
「あの……どちらまで行くのでしょう？」
「それが、会長ったら言ってくれなくて」
不安に耐えきれず口に出した疑問に、シャーリーが困惑と不安がないまぜになった声で答える。
「あなたはご存知なのでしょう」
思い切って、今度は運転席の男に声を掛けると、躊躇うような間を置いて、答えが帰ってきた。
「中央病院にお連れするよう言われております」
「病院！？」
シャーリーの悲鳴のような叫びが車の中に響く。ナナリーは、まるで奈落の底に落ち込んでいくような錯覚に捕われた。思わず小夜子の手をぎゅっと握ると、温かい手が励ますようにナナリーの手を包み込んだ。
「まさか、お兄様の身に何か……あったのですか？」

今度も一拍置いて、運転席の男が答えた。
「自分にはよく分かりません」
努めて感情を出さないようにしているが、ナナリーは、その声にわずかに含まれた憐憫の情を感じ取った。がくがくと、体が勝手に震え出す。
「そんな……」
かみ締めた唇から、呻くような声が漏れる。微かな衣擦れの音がして、シャーリーの振り返る気配がした。あきらかに空元気と分かる声音ではあったけれども、彼女は励ますようにナナリーに話しかけてくる。
「大丈夫よ、会長のことだもの、きっとドッキリか何かよ。私たちが真っ青になって駆け付けたら、ひっかかった～って笑いながら出て来るわよ」
励ましてくれる気持ちは嬉しいが、ナナリーには、とてもそうは思えなかった。ミレイは確かにやることなすことといろんな意味で弾けてはいるけども、一線を越えるようなことはこれまで一度もなかった。ああ見えて、特殊な事情を抱えたナナリーとルルーシュに最大限気を使ってくれていたことを、ナナリーは知っている。
全員が黙り込んで、それからどれくらい走ったのだろう。永遠にも思える時間が過ぎた後、車が止まった。ドアの開く音に、ナナリーは身の竦む心地がする。一刻も早く兄の安否を確かめたいという思いと、確かめるのが怖いという思いがせめぎあって、息もできないようだった。
しかし、無情に小夜子はナナリーを抱え上げ、車椅子に乗せかえる。そうして椅子を押されてしまえば、ナナリーに進むことを拒絶する余地は無いのだった。
自動ドアの開閉する音ともに、ナナリーの鼻は消毒液の匂いを捉える。病院特有の匂い。
運転していた男性が、ナナリーたちを先導して歩いて行く。一行は黙々と先に進んだ。入口の賑わいが次第に遠くなって、静かなエ

リアに入る。
先導の足音が止まると、シャーリーと小夜子が息を呑む音がやけに大きく聞こえた。彼女たちの瞳には、何が見えているのだろう。ナナリーはもどかしさに唇を噛んだ。
続いてノックの音、僅かの間の後に、自動ドアの開く音。戸口に出たのはミレイなのだろう、いつも彼女がつけている香水の香りが、ふわりと鼻をくすぐった。
「会長……！」
耳を打つのはシャーリーの驚きの声だ。その理由は、すぐに知れた。
「ナナちゃん……。間に合ったのね」
いつものミレイとは違って、しわがれた、今の今まで泣いていたと分かる涙声。その声は悲しみに満ちている。ナナリーは、車椅子の肘置きを強く握りしめた。何も聞きたくない。
「とにかく入って。こんなところに立っていたら邪魔になるわ」
私はこれで失礼します、と案内してくれた男性が一礼して、靴音が遠ざかっていく。
また静かに車椅子が動き出して、ナナリーは部屋の中へと入った。奇妙になま暖かい空気が頬を撫でる。空調の音、何かの機械の作動音、そして、ピッ、ピッ、と規則的に響く電子音。まるで心臓の鼓動のようなリズムだと考えて、慌ててそれを頭の中から打ち消す。
「うそ……そんな……」
後ろから聞こえて来るシャーリーの声は、絶望の気配に彩られている。
ナナリーは一つの結論に思考が行き着いてしまいそうになるのを、必死に堪えた。
認めたくなかった。認めてしまったら、ナナリーの世界はきっと崩壊してしまう。
「何が……あったのですか」
ナナリーは縋るようにミレイがいると思しき方向に顔を向けた。

「病院に運びこんだときには心肺停止状態で……どうにか蘇生はしたけど、まだ危ないって。命が助かっても、植物状態のままのことも考えられるそうよ」

最悪の言葉に、ああ、とナナリーは溜め息のような声を漏らした。

自分が包まれていた平和で優しい世界が、粉々になって崩れて行く音が聞こえる。いいや違う。七年前にとうに壊れていた筈の世界を、これまで兄が必死に繋ぎ合わせて守ってくれていたのだ。

「ナナちゃん！？」

――守り手を失った今、世界は、本来の姿に戻るしか、ない。

第5話

ノックの音が、室内に響いた。
「入れ」
視線を上げもせずに入室許可を出すと、ジェレミアの最も忠実な部下であり、副官を務めるヴィレッタが、するりと入ってくる。浅黒い肌、長い銀の髪を横で一つにまとめた、なかなかの美女である。
ここはエリア11ブリタニア総督府の中、栄えある総督直属のナイトメアフレーム一隊を率いる、辺境伯ジェレミア・ゴッドバルトに与えられた執務室だ。
主も部下も、先程、新宿ゲットーのテロリスト掃討作戦から帰投したところで、ジェレミアは報告書を書くのに追われているところだった。
「どうした、何かあったか」
帰投早々に、部下には休息を許可している。ヴィレッタも例外ではない。
「それが……少々気になることがございまして」
ジェレミアは手を止めて、顔を上げた。ヴィレッタの直感は侮れない。これまでにも助けられたことは何度もある。
「何だ。言ってみろ」
「先ほど、病院から問い合わせがありまして……ブリタニアの学生が撃たれて、運びこまれたそうなのですが、撃たれた時刻からして、ゲットー作戦時に巻き込まれた可能性が高いと」
「ほう……なるほどな」
対テロリストの戦闘に巻き込まれたなら、その少年がテロリストの仲間である可能性も否定できない。あんなところに好き好んで出入りするブリタニア人など滅多にいないからだ。
「ナイトメア戦に巻き込まれた可能性は？」
「銃瘡で、ナイトメアのものとは口径が違います。我が軍の兵士に

配付されている銃と同じものです」
「面白い」
ブリタニア人を撃ったという報告は、ジェレミアの目には触れていない。
あの時ヴァトレー将軍の命令を受けて動いていた親衛隊が撃ったか、それとも武器を盗んだテロリストが撃ったか。テロリストでないとしたら、あるいはその少年は盗まれたという機密物体を目撃したのではないか。そうでなくとも、テロリストが撃ったのだとしたら悲劇の少年としてテロリスト非難の宣伝材料になるだろうし、よしんばブリタニア軍の誤射だったとしたら、行った兵士をいかようにでも処分できる。ジェレミアにとって、損になるようなことは何もない。
ジェレミアは心を決めて立ち上がった。
「その少年が運びこまれたという病院へ行く。信頼できる部下を何名か選出せよ」
「ジェレミア卿が直接出向かれるのですか！？」
「ちょうど書類書きも飽きてきたところだ」
それに、とジェレミアは心の中で続ける。もしも少年が機密物体を目撃したというなら、それが何であるかは是非とも聞き出しておきたい。たとえヴィレッタであっても、人任せにはできないことだ。
ジェレミア達には軍事機密の内容が何であるか知らされていないが、総督と将軍の慌て振りを見る限り、最高機密に近い内容であることは間違いない。この先軍の中でのしあがっていくために、少しでも多くの材料を握っておくに越したことは無かった。

春の穏やかな日差しの元、美しく手入れされた庭園で、ナナリーは色とりどりの花を摘んでは歩き、また摘んで、歩いていた。歩き始めてすぐに、左手に下げた花籠は一杯になってしまった。隣を歩く義姉の籠を見れば、同じように一杯になっている。
二人は笑いあいながら、弾むような足取りで、四阿へと歩いてい

く。そこには、大好きな人達が待っている。穏やかな微笑みを浮かべた美しい母と、母に良く似た面差しの兄だ。
ああ、これは夢だ。まだナナリーが歩けて目も見えた時代の、曇りなく幸せだった子供時代の夢。この頃は自分を包む優しい世界が壊れてしまうことがあるなんて、想像したことすらなかった。
義姉と二人で花冠を作って、兄がどちらを被るかで、今度は他愛の無い口喧嘩が始まった。兄は困った顔で二人を交互になだめている。あの時、兄はどうしたのだったか。
今は遠すぎる、幸せな時代の残像に、目頭が熱くなるのを止められない。
ふいに、場面が変わった。気がつけば、小さなナナリーは、華やかな音楽の流れる夜会の中に立っていた。覚えている。この時ナナリーは、新しいドレスを仕立ててもらったのが嬉しくて、ご機嫌で母について歩いていた。
（やめて。この先を私に見せないで）
ナナリーはこの夢の続きを、嫌になるほど知っていた。七年前から、何度見たか知れない悪夢だ。
母の周りを飛び跳ねるように、長い階段を降りているときだった。けたたましい銃撃の音ともに、ガラスの砕け散る音が耳に突き刺さるのと、軟らかい感触に階段に押し倒されたのはほとんど同時だった。背中の痛みより先に、両足の激痛を感じた。
そして、ナナリーは、先ほどまで優しく微笑みを浮かべていた、美しい母の無残な姿を見た。見開かれた瞳は、もはやナナリーの姿を映すことはない。自分をかばって倒れた、その背中からはとめどなく温かい液体が流れ出して、ナナリーの手を濡らしていく。
（どうして。どうして。こんな光景、見たくない、見たくないの）
絶叫すると、場面が変わった。
ナナリーは、真っ暗な世界で、痛みと孤独と戦っていた。事件の直後、夢を見るのが怖くて、いっそ死んでしまいたくて、人形のように寝台に横たわっていた頃だ。絶望に彩られたナナリーの世界に、

今にも泣き出しそうな声音の言葉が響く。
「ナナリー、しっかりしろ……こんな傷、きっとすぐに良くなる。母さんもお前も失ったら、僕は……」
その声は、ナナリーと同じように、恐怖と絶望と孤独と戦っていた。
（ああ、私がいなくなったら、お兄様の心もきっと壊れてしまう）
ナナリーが戻らなければ、ルルーシュは一人になる。父はいるが、自分たち二人は数えるほどしかお会いしたことのない、遠い方だ。こうして伏しているナナリーの見舞いにさえも来ない父が、兄を支えてくれる筈もない。
現実に立ち戻るのは怖くて辛くて悲しい。けれど、自分が戻ることで兄の心が守られるというのならば、戻らなければ。
その時、ナナリーは確か、そう思ったのだ。
ナナリーが徐々に自分を取り返し始めると、ルルーシュは献身的に世話をしてくれた。それからずっと、二人で支え合うようにして生きてきた。精神的ショックから目を閉ざし、銃撃を受けた後遺症で歩けなくなったナナリーは、物理的には何らルルーシュを助けることはできなかったが、お互いがお互いの生きる理由なのだと、口に出さずとも分かっていた。
また、場面が変わる。
目の前に、まだ幼い時分――ナナリーの記憶に残るそのままの兄が、倒れていた。母のように、背中は銃弾で真っ赤に染まり、大好きだった綺麗な紫の瞳は、ガラス玉のように虚ろだ。
（そんな、こんなの嘘――。第一、お兄様は既に高校生で、こんな小さな頃にこんなことは起きてません）
こんな夢は間違っている。目覚めなければ、という思考とともに、意識が急速に現実に近付く。
真っ暗な世界に、現実の世界でミレイの呟いた言葉が谺した。
「いつ鼓動が止まってもおかしくない状態……」
母と歩行機能、そして視界を失ってから七年、兄の優しい声だけ

がナナリーの心に差し込む唯一の光だった。なのに、神様はそれすらもナナリーから奪おうとしている。永遠に。

兄を亡くしてしまったら、この世界で生き続けることなど考えられない。ならば、せめて最後に、ナナリーの名前を呼ぶ優しい声を聞きたかった。それが叶わないなら、まだ生きている兄の姿を、この目に焼き付けたい。

視界を閉ざしたあの日以来、初めて焼け付くような気持ちで、世界を見たいとナナリーは願った。

第6話

目に飛び込んで来た光と、それに伴う鈍い痛みに、ナナリーは思わず目を瞑った。長い間使用していなかった神経が、突然の刺激に悲鳴を上げている。

――光？目を瞑る？ナナリーは恐る恐る目を開けてみた。それは、呆気なく開いて、外の世界を映し出す。どんな医者にかかっても、どんなに兄が励ましてくれても開かなかったナナリーの瞳は、新たな精神的なショックを受けて七年ぶりに治ったというのだろうか。だとしたら、何という皮肉なのだろう。

無機質な白い天井と壁、鼻をつく消毒薬の匂い。絶え間なく響く規則的な電子音。夢ではなく、現実だ。

眠っている間に流れていた涙を指の先で拭う。

「じゅあ、ルルはテロに巻き込まれたっていうの？」

「たぶん……」

ぼそぼそと交わされるシャーリーとミレイの声に、ナナリーは視線を横にずらした。

二人の女性がこちらに背中を向けて立っている。そして、その向こう。透明なケースで覆われた寝台、そこに横たわっている人物に、ナナリーは息を呑んだ。

「お兄様……！」

二人は弾かれたように振り返った。

「ナナちゃん、眼……！」

ミレイと思しき女性が目を丸くするのも、ナナリーの目には入っていなかった。ナナリーはただ、その人のことだけを見ていた。母によく似た面差しの、秀麗な顔立ち、漆黒の髪。白皙の肌は血の気を失って青白く、命の気配のほとんど感じられない横顔。

呆然として身体を起こして、兄の眠る寝台に向かって手を伸ばす。バランスを崩して簡易寝台から落ちかけた身体を、脇から小夜子が

支えて、車椅子に乗せ替えてくれる。礼を言う余裕は、今のナナリーには無い。
二人が空けてくれた、ルルーシュの枕元に車椅子を進める。
そうして、震える手で寝台の表面を覆う透明なケースを撫でて、兄の顔を覗き込む。涙が一滴、二滴、とその上に滴り落ちた。
「お顔を拝見するのは七年ぶりですね……こんな……こんな形で、お兄様の姿を、見ることになるなんて……」
後ろでシャーリーの、鼻をすする音が響いた。
「お兄様、ナナリーです。どうか……どうか、お兄様の綺麗な紫の瞳をもう一回見せてください。私、目が見えるようになったんです。お願いです。私の名前、もう一度、呼んでください……」
――行って来るよ、ナナリー。最後に聞いた言葉が朝に聞いたその言葉だけなんて、あんまりだ。
「ナナちゃん……」
それきり絶句するミレイの声も、完全に涙声だ。
ナナリーは寝台に縋って、ただケースの上を撫で続けた。少しでも近くで兄の存在を感じたい。
どのくらいそうしていただろうか。室内にはただ、絶え間ない嗚咽と、鼻を啜る音、ＢＧＭに、ルルーシュの鼓動を伝える規則的な電子音が響くだけだった。
永遠にも続きそうなその合唱を中断させたのは、ピルル、ピルル、と場違いな明るい携帯電話の着信音だ。
「ちょっと……ごめん」
ミレイは断ってから、携帯を耳に当てた。
「はい、どうしたの？……え？……そう、分かりました。全員でここを出ます。正面入口で待っていて」
思いがけない言葉に、ナナリーは思わず振り返った。
「会長？」
シャーリーも抗議の声を上げる。
「ごめん。祖父が、心配して、私たちの夕食の手配をしてくれたみ

たい。車が迎えに来てるから、申し訳ないけど、祖父の顔を立ててもらえるかしら」
「会長のおじいさま……って、もしかして理事長！？」
そうよ、とミレイが頷けば、シャーリーは居住まいを正した。ミレイの祖父はアッシュフォード学園の理事長だ。そういえば、そろそろ寮の門限である。友人が危篤とはいえ、家族でもないシャーリーは付き添う理由にならないのだろうか。
「私はお兄様の側にいます」
ナナリーが首を振って答えると、その答えを予想していたように、ミレイは目を伏せた。ナナリーの側にやってきて、耳元に屈む。
「ブリタニア軍の一隊がこの部屋に向かってるそうよ。入口で問い合わせをしているのをうちの者が見たって」
それだけで、ナナリーは彼女の言わんとする事を理解した。ミレイは、ナナリー達の本当の素性を知る、数少ない人物のひとりだ。ナナリーもルルーシュも、軍との接触は極力避けるべき立場だが、ルルーシュは今はとても動かせない。だからナナリーだけでも逃げろと言うのだろう。おそらく夕食云々は、この場から人を引きはがす為の方便だ。
「私は、お兄様と運命を共にします」
それが分かっても、ナナリーは返事を変えなかった。変えられる筈がない。
「ナナちゃん……」
「お兄様がいたから、私は今日まで生きてきました。……だから、死ぬのも一緒です」
囁いて、にこりと微笑むと、ミレイがそれ以上何も言えなくなるのが分かった。車椅子の向きを変えて、シャーリーと小夜子にもぺこりとお辞儀する。
「ごめんなさい、私、お兄様と二人でお話ししたいんです。……時間が勿体なくて」
それもまた、ナナリーの偽らざる本音だ。

「……仕方ないわね」
ミレイは、諦めたように溜め息をついて身を起こした。
「すみません、ミレイさん。ミレイさんのおじいさまに、私からお礼とお詫びをお伝えしていただけますか？今までありがとうございましたと」
「分かった。伝えるわ」
そのやりとりに、部屋からほとんど出かけていたシャーリーが立ち止まって怪訝そうに振り向く。
「ナナちゃん……？」
「さ、兄妹の語らいを邪魔しちゃダメよ。私たちは行きましょう」
ミレイと小夜子がシャーリーを半ば強引に押し出して出て行くと、病室の中には束の間の静かな一時が訪れた。ただ、規則的にルルーシュの鼓動を示す電子音だけが時を刻む。
ナナリーは、物言わぬ兄を見つめながら、その時をじっと待った。
ルルーシュを撃ったのは、ブリタニア軍なのかもしれない。そうでなくとも、ナナリー達の事が知られれば、どうなるかは分からない。もしも軍が、ルルーシュにとどめを刺すというのならば、ナナリーは、ここで兄と共に果てるつもりだった。元より、抵抗する術も逃げる術もない。
やがて複数の足音が廊下から響いてくると、ナナリーは膝の上で掌を握り締めた。
「お兄様……愛しています。私だけは、ずっとずっと一緒です……」

第7話

「ヴィレッタ」
ジェレミアは示された病室の手前で立ち止まり、副官の名を呼ばわった。
「心得ております」
返事と共に、ヴィレッタ以下、ジェレミアについてきた四人の兵士が銃を取り出して、それぞれ問題の部屋のドアの左右の壁に張り付く。
周辺に人の気配はなく、要請どおり、人払いが為されているようだ。ここまで案内してきた看護婦も、先ほど怯えた顔で引き返していった。
目配せの元、四人はドアを開けて一斉に突入する。
「動くな！我々は総督直属軍だ！」
室内に、抵抗の気配はない。
入室して、まずジェレミアの視界に入ったのは、寝台の脇に佇む、車椅子の後姿だった。横たわる患者と思しき人影の顔は車椅子に遮られて見えないが、枕元のモニターには、心臓の波形と思しき曲線が規則正しく踊っている。
「ゆっくりとこちらを向け！」
銃を構えたままヴィレッタが威圧すると、車椅子は静かに回転した。
座っているのは、波打つ栗色の長い髪と青い瞳の、面差しに幼さを残した可憐な美少女だ。充血した眼と、腫れぼったい目元は、少女がたった今まで泣いていたことを窺わせる。
「……軍が、私達に何のご用でしょうか」
泣いて枯れた声で少女は言った。銃を突きつけられているというのに、不思議と物怖じしている様子はない。
「そちらの少年に聞きたいことがある」

ジェレミアが横柄な口調で言うと、少女は首を振った。
「申し訳ありませんが、お兄様は、話ができる状態ではありません」
そんなことは病院から知らされている。ジェレミアは鼻で笑った。
「ショックを与えてでも、一時的に話ができればそれでよい」
暗にその後の生死は問わないという言葉に、少女は瞳を限界まで大きく見開いて、ジェレミアの顔を見上げてくる。
そのとき、微かな既視感にジェレミアの胸がざわついた。この少女は、記憶の中の誰かに似ている。
「そんな……お兄様を、殺すと言うのですか」
ジェレミアは、まとわりつく既視感を振り払うように、歩を進めた。
「どいていなさい、お嬢さん。我々は武器を持っていない、か弱い女性に暴力を振るう気はない」
「いいえ！」
少女は、果敢にも両手を広げて、ジェレミアを通すまいとする。
「無礼者！」
ヴィレッタがすぐさま取り押さえて、車椅子ごと乱暴に脇にどけた。少女が遮二無二暴れだす。
「お兄様まで……お母様だけでなくお兄様まで、私から奪おうというのですか。私達が何をしたというのです……！」
泣き叫んでヴィレッタを押し返そうとする少女に、戦場にあっては毅然とした強さで敵を駆逐する女騎士も、少々困惑顔だ。無理も無い。テロリスト相手ならばともかく、懸命に向かってくるのは、あきらかな一般人の、それも足が不自由なか弱い少女である。攻撃の意志はなく、ただひたむきに兄の傍に行こうとするその姿は、見る者に哀れを誘った。命令でなければ撃ちたいとは思うまい。実際、他の兵士も困ったように眉を寄せて眺めるだけで、手出しをしようとはしなかった。
ジェレミアは少女を無視して、寝台の傍らに進んだ。患者の周囲を無菌に保つ透明な覆いを開こうと枕元のスイッチに手を伸ばし、

ふと中の人物を見下ろして、動きを止める。
青白い顔で横たわっているのは、艶やかな黒髪に縁取られた、端正な顔立ちの少年だ。
「やめて、やめてください！お兄様はまだ生きてるのに！！」
ジェレミアが動きを止めたのは、悲痛な叫びに憐憫の情をもよおしたからではなかった。またも胸をざわつかせた既視感のせいだ。無視できないほどに育ったその感覚が、ジェレミアの手を制止している。
――似ている。
軍人であれば、瀕死の人間を見るのも、死体を見るのも珍しいことではない。だが、ジェレミアに今確かな異変を訴えかけているのは、七年前から悔恨と共に繰り返し思い出し続けた、もはや脳裏に焼きついて離れない、特別な意味を持つ記憶だった。
無数の銃弾を受けて、高貴な人の背中から流れ出した血が、緩やかに階下へと滴り落ちて行く。見開かれた青い瞳に光はなく、彼女の魂が既にそこから飛び去ってしまったことは、確かめるまでもなく明白だった。そして、あの時彼女に庇われて命こそ助かったものの、両足を撃ち抜かれた栗色の髪の少女と、半狂乱で二人に取りすがっていた黒髪の少年――今も鮮やかに浮かぶ彼らの姿に、ジェレミアはまじまじと横たわる少年を見つめた。
咄嗟に思い浮かべたことの突拍子の無さに、頭を振る。
馬鹿馬鹿しい。二人は、とうにこの世から喪われている。もう七年も前のことだ。彼らは、まだ日本と呼ばれていたこの地に送られて、命を落とした。そう、この地で。
あの少年に、この少年は、ひどく似ている。まるで、そのまま歳を取ったかのようだ。
愚かしいことを考えていると分かっていても、ジェレミアには己の世界に突如として差し込んだ一縷の光を無視することはできなかった。
「ヴィレッタ。この少年の名前は何と言ったか」

「は……？ルルーシュ・ランペルージです」
上官の唐突な質問に戸惑いながら、ヴィレッタが答える。
ジェレミアは、泣き叫びながら、懸命に傍へ近づこうとする少女を見やった。年頃、栗色の髪、青い瞳、不自由な両足。――その、顔立ち。
コツリ、と向きを変えて、ジェレミアは少女を見下ろした。
「……名は？」
掠れた声で問うジェレミアに、ヴィレッタが眉を寄せる。
「は？ですから、ルルーシュ・ランペルージと……」
「この少年の名前ではなく、その娘の名前だ」
ジェレミアの言葉を聞くやいなや、少女はぴたりと暴れるのをやめた。
「おい、名は何と言う」
ヴィレッタの問いに、少女は躊躇うように、顔を俯かせた。
「さっさと答えろ。お前の兄がどうなってもいいのか」
「……ナナリー・ランペルージと、申します」
蚊の鳴くような声で、少女は答えた。
ルルーシュとナナリー。ジェレミアは口の中でその名前を転がした。
これは本当に偶然だろうか。二人の歳格好と、名前と、エリア11という場所の三つもの符号の一致。果たして、そんな奇跡のようなことが、本当に起こりうるのだろうか。
間諜という可能性を考えて、ジェレミアはすぐにそれを否定した。横たわる少年が瀕死の状態であるのは疑いもなく確かなことであったし、少女の嘆く様子は演技にはとても見えない。そもそも、間諜であるなら、ジェレミアに対して、もっと違う名前を名乗っていたはずだ。――ならば。
ジェレミアは眼をかっと見開いた。
「全員、この部屋より退室し、廊下で待機せよ。その少女と二人で話をする」

「ジェレミア卿？」
「命令だ」
有無を言わさない強い口調に、ヴィレッタ達が、渋々といったように退出していく。
二人だけになると、ジェレミアは改めて車椅子の少女に向き直った。躊躇いもなくその前に跪き、頭を垂れる。
「ご無礼を何卒お許しください。私はジェレミア・ゴッドバルトと申します。辺境伯の爵位を賜っております」
病室の中に、息を呑む音が響いた。

第8話

ナナリーは目の前に跪く青年将校を見つめた。貴族の傲慢さが表面ににじみ出ているような青年だ。その印象の通りに、先ほどまでは横柄な態度であったのに、今はそのような気配は微塵も無い。声には、本物の敬意が込められている。

対応を迷ったのは数秒ほどだ。その数秒こそが何よりの肯定となることを知りつつも、ナナリーは白々しく答えた。

「……どなたかと、お間違えではありませんか。私は伯爵閣下に跪いていただくような身分の者ではありません」

目の前の男は、がばりと顔を上げて、ナナリーを見つめた。その瞳には、訴えかけるような真摯な光が宿っている。

「ナナリー様……！わたしは……八年前、アリエス宮の警護任務についておりました」

青年の言葉に、ナナリーは動揺を抑え切れなかった。アリエス宮。ルルーシュとナナリーが生まれ育ち、そして母が殺された忌まわしい場所の名前。

「……私は、そのような場所の名前は存じません」

それでも、ナナリーはそう答えるしかなかった。戦争が終ったあとも、ブリタニアから隠れることを選んだ兄は、かつての場所に戻ることを望んでいなかった。むしろ憎んでいたと言ってもいい。兄の意識が戻らない今、命を守ることは無理でも、その矜持だけは守りたい。それだけが、今となってはナナリーがルルーシュのためにできる唯一のことだった。

「ナナリー様……ブリタニアを恨んでらっしゃるのですね。お二人を捨てたブリタニアを……」

ジェレミアと名乗った男の両目から、突然ぶわりと涙が溢れだし、ナナリーは意表をつかれて、さらに動揺した。

「お許しください！マリアンヌ様さえご存命であったなら、お二人

が日本に送られることも無かった！マリアンヌ様をお守りし切れなかった私が、お二人を死に追いやったも同然です……！しかし、しかし、お二人は生きておられた！どうか私に、七年前の償いの機会をお与えください！このジェレミア・ゴッドバルト、身命を賭してお二人をお守り致します」

どうか、と言って顔を伏せた青年の涙が、床に一滴二滴と垂れた。その声にも、涙にも、嘘は感じられない。迷った末に、ナナリーは口を開く。

「……とても、辛いお気持ちだったのですね」

ナナリーが労るように言えば、青年将校はおお、と感激したように顔を上げた。

「私には詳しい経緯は分かりません……でも、そのお二人は、きっとあなたを恨んではいないと思います」

だから、気になさることはないのです、とナナリーが続けると、青年は目をさらに見開いて、激しく首を振った。

「なぜです、なぜお認めくださらないのです。この私が嘘を言っていると思っておられるのですか」

「いいえ。あなたのお気持ちはよく分かりました。……きっと、そのお二人が聞いたら、喜んだと思います」

それはナナリーの正直な気持ちだった。自分たちは、とうにブリタニアに何かを期待することをやめている。それでも、自分たちの死から七年を経た今も、心を残していてくれた人がいるという事実は、仄かにナナリーの心を温かくした。

しかし、青年は諦めなかった。

「ナナリー様！……ナナリー様は、兄君を、ルルーシュ様を、お見捨てになるのですか」

ナナリーは、横から殴られたような衝撃に、車椅子の肘掛けをぎゅっと握り締めた。

自分がルルーシュを見捨てることなど、ある筈がない。ルルーシュは七年前からずっと、ナナリーの生きる理由だった。

「兄君はまだ生きておられるではありませんか。しかし、兄君を撃った人間が――撃てと命令した人間が、兄君の生存を聞き付けたら、どうやって兄君をお守りするおつもりです」
もちろん、守る手立てなどありはしない。だから、そうなったら、ナナリーは運命を共にするつもりでいた。そう思っているのに、青年の言葉に心が揺らぐのは、弱さの証拠だろうか。
「ブリタニアの最高の医療技術をもってすれば、兄君も助かるかもしれないではありませんか。ナナリー様は、兄君を見殺しにされるのですか！」
重ねられた非難の言葉は、ナナリーの最も弱い所を衝いた。数分ほど、規則的な電子音だけが、沈黙の中に流れる。やがて、ナナリーは、視線をジェレミアからルルーシュへと移した。
「お兄様は……ブリタニアを……皇帝陛下を、憎んでおられます……」
呟いて、ナナリーはぴくりとも動かない、ルルーシュの整った顔立ちを見つめる。
「お兄様は、プライドの高いお方です。ブリタニアに縋って、命を長らえたところで、決してお喜びにはならないでしょう」
その言葉を聞いて、ジェレミアの顔が歪んだ。
「ですが……！」
反論するジェレミアの言葉を遮って、ナナリーは続けた。
「お兄様は、私を、私の心をずっと守ってくださいました。今度は、私がお兄様を、お兄様のお心をお守りする番なのです……」
ナナリーの両目から、堪えきれない涙が溢れ出した。
「なのに、私は我が侭です。たとえお兄様が望まないと分かっていても……恨まれても、憎まれてもいい。それでも、私はお兄様に生きていて欲しい。お兄様のお声を、もう一度聞きたいのです。この願いは、罪なのでしょうか……」
ジェレミアは、両目から更なる涙を溢れさせ、首を振った。
「それを罪だなどと、誰に言えましょう。ご家族として、当然のお

気持ちではございませんか……！」
「ジェレミア卿……と仰いましたね」
「ジェレミアとお呼びください」
青年は嬉しそうに答えた。
「手を……よろしいですか」
ジェレミアが怪訝そうに、体を起こし右手を差し出す。ナナリーはその手を両手で包みこんだ。
「な、ナナリー様？」
狼狽えるジェレミアの瞳を、ナナリーはじっとのぞきこんだ。
「お兄様をお助けするために、どうか……どうか、あなたの力を、貸していただけますか」
青年の手がびくりと震えた。後ろめたさの所為ではなく、心底感激している所為だ。
「勿体ないお言葉……我が身命を賭して……必ず、お守り致します」
もう一度深々と一礼し、青年は病室から出ていく。
それを見送って、ナナリーは車椅子を寝台に寄せた。その上を覆う無機質なカバーに頬を寄せる。当たり前だが兄の体温など欠片も感じられない。それでも、少しでも近くで存在を感じたかった。
「私は……我が侭です。お兄様……ごめんなさい……」
とめどなく溢れる涙を拭いもせずに、少女はただ、同じ言葉を繰り返した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9705w/

コードギアス「罪と罰」

2012年1月3日19時50分発行